

551
165

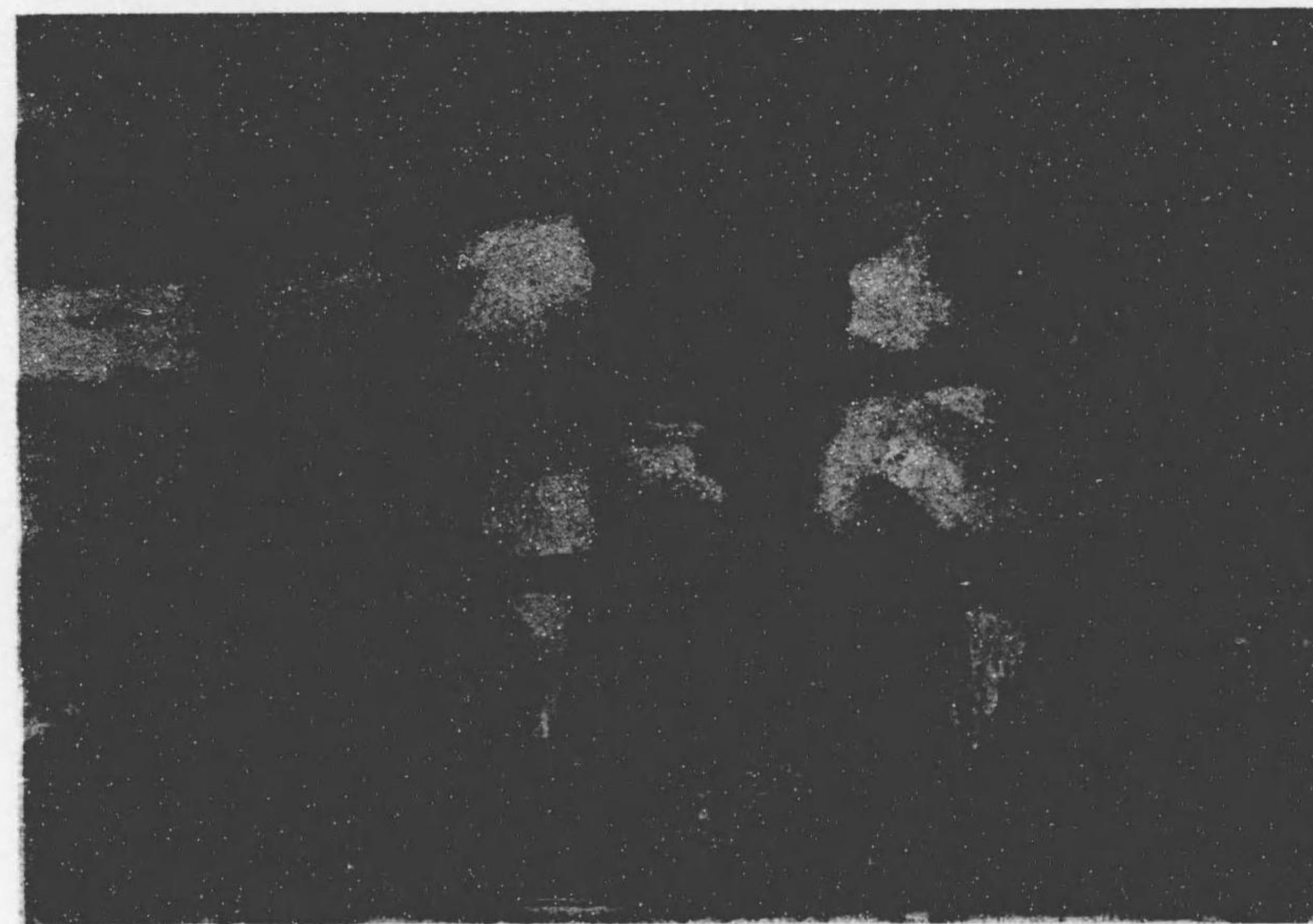
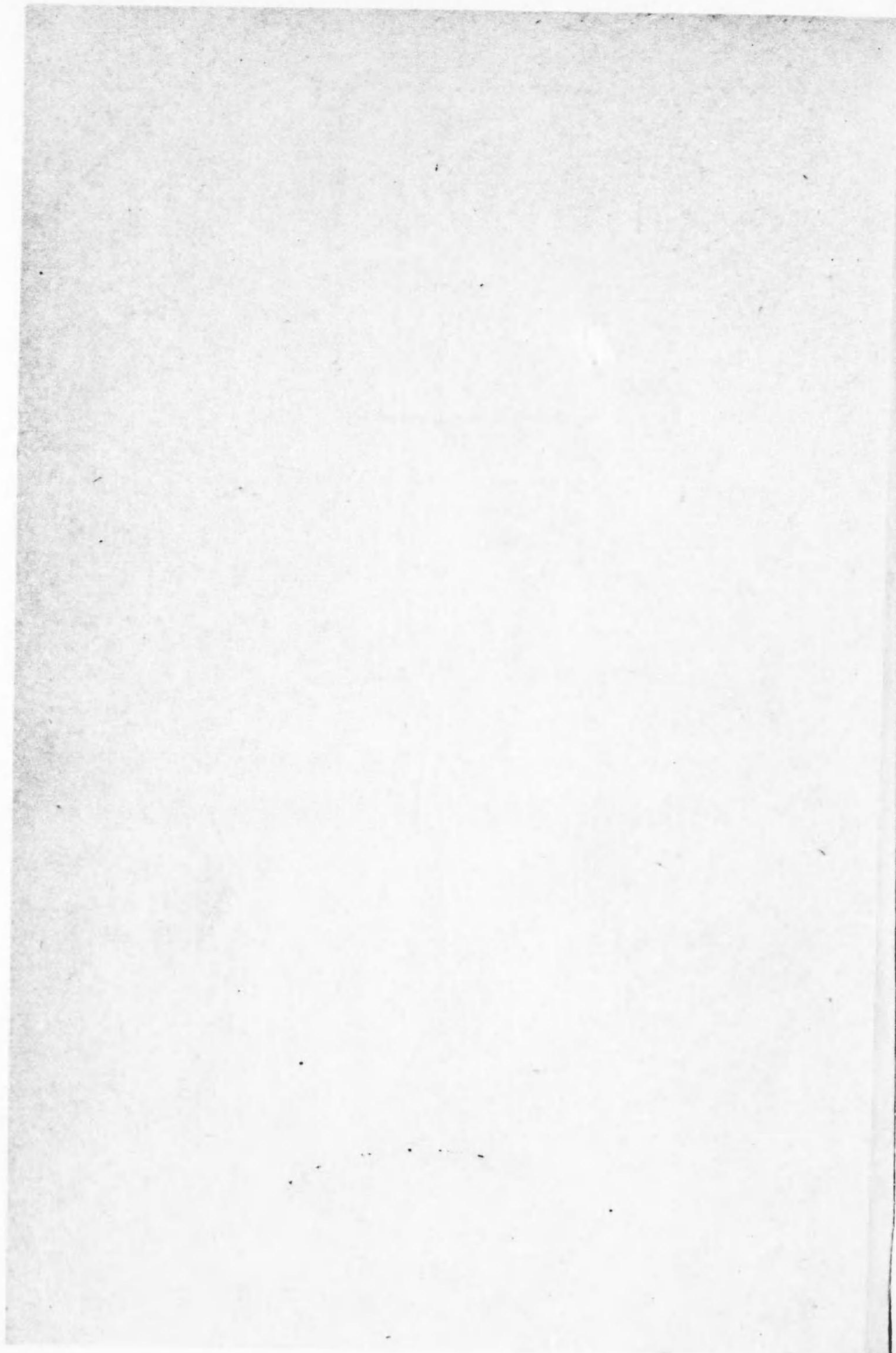
0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{3m} 1 2 3 4 5

始



551

165



集歌外又ハト



ORA ET LABORA

著風羅木三



551-165

トラピスト歌集

三木羅風

トラピスト歌集

トラピスト歌集

三

十代とて久しき楽

鶯ウグイスの日ヒ毎ヒトヒト來キて啼ナクく我宿ウレヤドの春ハルは静シズカに住スみよか
りけり



春雨ハルアメのししづずかにかに薫カゆる青松アヲマツの林ノに鳥トリは住スひた
りけり
曉トキヨミの雨アメああたたかにかにうるほほひひて野ノももせせにに満ミつつる
鳥トリのノここゑゑくく

海士の子は貝とりあつめ海草をそれに盛りつ
遊びけるかな

昔の葉を吹ける風にも春の氣は心ありげにあ
ふれたりけり

静かなる朝の光に照りそひて櫻の枝に雪はふ
り積む

静なる朝にまたもや降る雪の櫻の枝に積りた
りけり

夕空に櫻の枝の翳したる見れば静けさ心澄む
かも

舟一つ磯邊にかゝり青海のはるか彼方に沖の
島見ゆ

櫻のまだ蕾を解かずうるほひて雨に風情のの多く
もあるかな

六

水の音せゝらぐふちに山吹の枝ながら伏す春
の曙

いつしかに水蒿まささり雪消えて谷の鳴るころ
鶯啼かん

吹く風に春日の煙りて白雲の往きかふ晝のたの
しくもあるかな

烟のより烟のに煙る春雨を山の此面に眺めやるか
も

あたゝかき雲野にありて風そよぎ羊は見えず
子らのゆくみゆ

七

春雨の谷深く啼く鶯のすがたは見えず杉の林
に

八

日の岡とよばましと思ふ今よりは朝に夕ゆふへに清
き草丘

山見えず雪しらぐの明方あけがたの林の上に小雨す
るかも

静なる水のしたたる音のしてたゞそれのみに
夜は更よけゆく

修院に見ゆる燈火たゞ一つ夜のころの淋し
く思ほゆ

静なる心を有ちて暮くさまし神の聖旨あかしごの中にあ
る身は

九

枯草にわづかばかりがまぢりたる青きを見れば春を知らるる

雨の音宵のほどより降り出でて雪を溶かしぬはだらの雪を

賜はりし神の恵の中にしも我らは生きむこの日此ごろ

いづこよりくる風ならむ雨そひてうつゝともなく春の夜を吹く

試に打ち克むとは思ふかなすべてを神によりたのむ身は

春の来て雪の溶けしがやがてまたあらしにまぢる日は照りながら

松かさのなほまだ残る春の路ゆけども盡さず
松の林は

しばらくは朧月夜の外を見む濤はしづかに雲
は眞白し

櫻かげ月夜にさして我目たゞ夜の沈黙をさび
しくとらふ

火かげにて人を待つてふ心をば道の友には有
たれけるかな

笹の葉の動くを見れば吹く風のあらしの如く
強くはあらず

女にょ枝えだ持ちもちてて歡よろこびび迎むかふふ基督キリストの道みちには満みつつるる老ろう若にやく男なん

枝の日に山よりとりて青木をば手に手に持ち
て祝ふなりけり(以上二首枝の祝日に)

辱め多き世に生れ道を行く我は一人にあらざ
りけらし

静なる雨にうるほひ野に出でて鳥をさしつゝ
青草をふむ

松の葉に色ます雨のふりやみて雫を落す春の
曉あけつぎ

芝生には青草まぢり枯くさの雨にうるほふ朝
にもあるかな

雲雀なき朝日は出でず濤の音ほのにきこゆる
春の曙あけぼの

雀あまた集ひて鳴けり春雨の静なる朝の家の
軒端に

朝浄め祈の場の静けさをやぶるは鐘の響なり
けり

青空の木の枝越しに見ゆるかな坂を登れば額
の上に

往き通ふ遠の白雲峰を越え亂るるすがたおも
しろきかな

道 望

海風きて青く静に函館の山も見えたり白き燈
臺

春風はたはむれて吹くと思はるゝ松の嵐は匂
ふが如く

茜あかねさす夕ゆふの海の空高くのぼれる月を獨り眺む
る

○ 春の月花は咲かねど花のごとうるはし空にの
ぼる海路うみぢを

○ さしかはす櫻の枝を空に見る春の月夜の美し
きかも

月つき明り静しずかに照りて夜を更くる窓べにあれば心
たのしき

蘆あしの邊へに流るゝ水の雪を無みくゞめる音に静
けさまさる

どよみ來る潮うしほの音の磯にしてしらぐ明くる
春の曉

○ 去年の鳥来て啼く朝の歌ばし神の賜ひし春の
もとづれ

秋風の吹くと思はるうらゝかに日は照りたれ
ど風の寒けく

青空のひろきを見ればはるかなる國を思ほゆ
水のほとりに

松の葉の上にかゝれる青空をまたなきものと
思ひけるかな

北海道丸山

丸山に雪は残れど春風は吹きめぐりたり野を
横に横に

たちまちに驚き醒めむ夜半の夢散るは花には
あらで命ぞ

あたくかき日照り満つる青空の高きを見れば
心たのしも

津田利に

若狭なる小濱の友を思ひいづ日も入りがての
春の夕暮

道の友送りいだして静なる愛をよぼえぬ朧月
夜に

藤蔓の花なほ咲かず枝を垂れ水の邊に絡む北
の三月

杉の木を切りたる株の下路に青苔匂ふ幽なる
かも

梟の鳴きたる晝の並木路奥の深さを聲にしも
思ふ

山裾をめぐり流るゝ谷川の雪解の水に春を知
らるゝ

奥山の春を知らむと眺めやるかなたはるかに
馬子の笛鳴る

風に飛ぶ木の葉の一つ見えなくなりてさびしさ
まさる夕暮の路

春なれど寒ければ焚くストーブの薪の燃ゆる
がなつかしきかな

夕暮の水色なせる空を見て天なる國をおもふ
一時

霏はれてのぼる霞と移り行き鳩なく春の晝の
長閑けさ

風吹きてすこしばかりのさはやかさ鶯の聲と
きどきに聴く

芥焚く煙しづかに青くして鳥影さしぬ春の日
和に

空と地と一つになりて静なる春の夕の雲ぞあ
がれる

何蟲か鳴き出でにけり初夏の蟬にも似たる心
地冬ぞも

ふるさとの澤の蘭草をおもひいづ渡嶋の水の
ほとりに立ちて

夕暮の静なる室にたゞ一人物思ひをれば風の
そよげり

やゝすこし明りの窓に残りたる一時をしも思
に沈む

濤の音風にまぢりて聞えくる夜を我ひとり物
思ひをり

雨の音たばしる如しいつしかに夏は來らむ春
は過ぎつゝ

鳥影のさして行きけり櫻咲く窓邊の晝のいと
閑にて

白ざくら咲きそろひたりその下に櫻草もある
晝のよろしさ

風少し出で來りたり春の暮小鳥も鳴かずなり
てさびしき

風そよぐ窓べによりて櫻草櫻の下に咲くをな
がめぬ

くもりたる初夏の晝鳥あまた散りほひてあり
青草の原

音訪れよその聲をもて閑古鳥憂きこと知らぬ
我にはあれども

薄絹をへだてし如くやはらかに露のかゝれる
朝にもあるかな

我家になぢめる小鳥兄弟の小さなる者と思ひ
けるかも

初夏の風さはやかに夕暮の日没をふく今日の
一日

月夜よし木履を履きて裏口に片付けをする夕
仕舞する

窓かけのかげより月を眺むれば霞かゝれり海
の光は

羊あまた遠くに出でて牛もまた草を食みをり
牧童はしる

子が母をよぶ聲のする春雨のしとしとと降る
青き小徑に

一しきり雲より見ゆる雨の脚霽れての後は月
出でにけり

軒下に立ち出で見れば夕月のほのかにさして
雨はれにけり

風やみてますますにぞ降る雨の音いとさはやかに思ひけるかも

青空の晴れわたりたり鶯のさやかに啼ける朝の一時

家居近く鶯の啼く聲のして春風の香梢をわたる

鶯のをりをりに啼く晝の日の風のそよぎを聞くぞたのしき

山鳩も啼きそめにけり初夏の我家の裏の松の林に

色浅き堇の花をなつかしむ人の心の浅きに似て

春なれど鳴啼く朝のほのあかり目ざめながら
に物思ひをり

初夏の影濃き路に啼く鳥を木がくれに聴く午
後の一時

櫻日にかざして咲くを見たりけり杉の並木の
一筋道に

松かげにたどり来ぬれば藤蔓の垂れさがりた
り夏の早さに

水の邊を渡れる風をなつかしむ小波うごく松
の下かけ

朝まだき鳥の啼く聲聞え来て山のかなたは曇
り空なる

海邊にて拾ひし石を手にとりて玉の如くに愛
でにけるかも

しばらくは夕の思にふけらまし水仙の咲く花
壇のほとり

牛一つ放たれてある廣き野のかなたに遙夕の
日は落つ

雨やみて夕しづかに鳥のなく霞は空をこめて
ありけり

夕暮の木の間こに啼なける鳥の聲やはらぎ満ちて
草青みたり

静しずなるたゝずまひなる聖堂せいどうのほとりの夕心澄
ひかも

草青き野のたゞずまひ窓よりぞ静に見ゆる初
夏の暮

波風の立ちさはぐ世になど我の楽しき日をば
送るなるらむ

北風の吹けば皐月の春の日も冬には似たる心
地こそすれ

戸をしめてしばしありけり北風の吹ける五月
の北國の春

紫の花野に咲きていつもいつも春の來るを忘
れかねつも

憂き雲の空にたゞよふ夕なり心にかゝる事は
あらねど

ときくは雨か風かは知らねども音づれて來ぬ春の夜更けに

鶏の鳴く時過ぎて朝ぼらけ風のまにく雲のはれゆく

鳥影のふとさしたるに目をあげて見れば風吹く初夏の晝

春の夜は蛙なくなりしめやかなの雨にまぢりて遠くはるかに

風吹きてまた音づれぬ我家の月なき夜の春雨の頃

遠くより吹き來る風の凄まじさ渡れば雨も添ふてさびしき

祈^{いのち}してやすむばかりになりたりと思へば樂^{たの}し
心ゆくまで

目^め覺^さむれば日^ひうらゝかに差^さ入りて鳥^{とり}の聲^{こゑ}する
山の一つ家^{いへ}

落^{おち}葉^は松^{まつ}の林^{はやし}の中^{なか}を妻^{つま}とともに友^{とも}どちの子^こを伴^{とも}
ひ行きぬ

簾^{すだ}かけに鶯^{うぐいす}啼^なきて静^{しず}なる目^め覺^さめの朝^{あさ}に日^ひはう
らゝけし

甘^{あま}き水^{みづ}日^ひ毎^{ごと}流^{なが}れてうるはしき生^{いのち}命^{めい}の如^{ごと}し我^{わが}家^{いへ}
の寛^{かひ}

櫻^{さくら}やゝ咲^さきそめにけり我^{わが}家^{いへ}の静^{しず}なる春^{はる}に心^{こゝろ}怡^{たの}
しむ

こゝは鳥の聲と光と心澄むことのみぞあるう
らゝかなる日

人來り種を蒔き居る春日和畑の土のやはらか
きかも

下枝には咲き初めにけり南の櫻はなほも春風
のして

雀二羽胡瓜の種を啄めどそのまゝにせよ追は
ずあれかし

常に來て春鳴く鳥よ汝には神の恵の深くあれ
かし

玉垂れの軒にしたゝる音さけば春は山家に音
づれきたる

春の月ほのかに照りて白き花風にゆらげり我
窓の外

いつのまに照りそめにけむ春の月昨日も今日
も中空にあり

櫻いよゝ咲きまさりけり朧夜の月にかざして
花は見えずも

谷水の流れの音のせゝらぎて風にまぎるゝ春
の薄宵

いざ立たむ我家の外に出づるとも神と共にぞ
ある吾なれば

月かけのさし入るなべに聖堂の屋根の圓さが
ほの見ゆるかな

寝ぬる夜に月影させよ圓かなる夢を結ばむ淡
明りして

いつまでか照る月ならむ夜更けて山の上には
星の移るを

反古ちらし集めし中にある我は淋しくもあら
ず春の夜更けて

白々と露に霞めり我が月は流れの音もやはら
かくして

青空のひろきを思へ我神の裳裾の如し朝明の
空

蒲公英の花は黄にして小さけれど菊にもまさ
る花にてありけり

水の香草叢にしてしたみ出づるあふれの中に
草木茂れり

いと白き櫻の花の散る時に風は幽けく空をわ
たりぬ

青松の中にまぢりて櫻木の半は早も咲きそろ
ひけり

藤蔓にいまだ葉はなしさはされど水に縊るあ
やおもしろきかな

松が根に櫻の花の寄り行きて水は流れぬ池の
なかどを

遠山の霞みたりけりこなたなる松の林に風は
吹き来て

春の日にそゞろあるきの小丘より櫻へだて、
燈臺を見る

梅あまた咲けるを見ればなつかしむまたも來
ることなしと思ふに

井の中をのぞきて見れば青苔の透きて見えけ
り春の一日に

年毎に花を見けるが今つひに別れの時となり
にけるかも

日の岡と呼びたる岡も今つひに別れの時とな
りにけるかも

夜は更けて月は櫻に照りたらむ祈して寝む春
の一夜を

春雨の霽れて雲間の明るきは山の彼方に日の
あるならむ

函館の山の彼方に月あらむ雲の絶間に光ほの
見ゆ

雲霽れて明るき空に風たちぬ海の彼方に白波
立ちて

春雨の中に鳴く鳥さゝ鳥よ鶯もまた聲を合せ
り

頃 谷渡るうぐひすの聲六月も近しと思ふ春雨の

うつ 春雨の一日は暮れぬ静なる雨と風とは我窓を

今宵しも月こそなけれ雨降りて櫻を思ふ我家
の櫻

雨霽れて明るき空に雲と松光りたりけり此世
美し

雨降りて櫻の花をうるほしぬ幽けきゆらぎ目
にぞとどむる

蒲公英の青草まぢり咲きそろふ五月も末の我
家の畑

朝十時鐘鳴り出て修院の勤は雨の中にありけ
り

日照りて花みなゆらぐまひるごろ風のそよぎ
のしるく見えけり

落の葉に幽けきそよぎ見られけり雲の晴間に
吹ける下風

桐の木の青さを見れば古の歌よみし聖思ひ出
でつもの

若芽せしポプラの枝を手にとりて春の遅さを
問ひても見たり

風吹きて寒しと思ふ西の方晴れてあれども北
海の春

廣重の繪にも似たりと屢々に思ふ漁村の春の
頃

谷深く青葉もほひぬ白き花中に咲きたり何花
ならむ

とある樹をつねに見にしがいつの日か又來て
汝を見ることならむ

五月十七日トラピスト修道院の月を見て

月高く圓なるにぞ思はるゝいつの日またも此
處に見んやと

夜白く輝く月は大神の天つ光の影にてありけ
り

櫻花盛りの時に春の月見るは樂しも我家のさ
くら

影さして疊の上に見る月をいとあざやかに思
ひけるかも

大空の月の光に花はみな同じき色にそよぎた
りけり

青松にさしたる月は影濃くて静に草にしるし
たるかな

六四

風吹きて櫻の枝をうごかしぬ月の光は隈なき
夜に

木瓜の花翳せる枝に月の色さしたる夜は静な
るかな

青空にかざす櫻を美しき月の光は隈なくさし
て

落葉松の林の上の月明り空と地とは青みてあ
るかな

閑古鳥啼き初めにけり我宿の松の林の青空の
下

六五

雲下りて山をかくせり五月雨の頃にもあらぬ
春雨の日に

牛一つ遙の丘の上にをり雲は明るく白く立ち
たり

聖堂の十字架の上一ところ青空の見ゆ雨霽れ
の日に

青草に露おける野をわれは行くポプラの立て
る初夏の路

踏まれふまれてなほ花咲ける雛菊の紅きを見
たり我ゆく路に

廢園の、とある路の邊、松一つあるもなつかしい
つか又見む

遠海に霞立ちたり雲低く山のいたゞきほの見
ゆるかな

客去りて雨は静に落ち來るトラビストの春は
静なるかな

雲白く又灰色に青空にむらがる晝の美しさか
な

落葉松の林まばらに鳥が啼くこなたの草の野
は青みたり

松原の高き所に白き雲疊なはりたり威のひか
りよ

蕨探り松原に來て静なる雨雲を見る今か降り
來む

雨降りてわらび生ひたり草の間に松葉かきの
け春の日のもと

子等遊ぶ道の邊の草青くして櫻はなほも咲き
てありけり

春の夜の月はほぼろに星もまたいと柔かし清
き風吹く

しめやかなの月の影ふみ野を行けば彼方に見ゆ
る白き海路よ

春の夜のそとろあるきの路の上草の末より月
を見るかな

月照りぬ聖堂の前の廣庭に人の影する松の影
する

かゞやかに月は照りたり居ながらに我家に見
る白き海路を

くもりたる初夏の日に閑古鳥啼きやみにけり
晝のしづけし

閑古鳥遠き林に啼き居しが近くはなりぬ何の
木ならむ

閑古鳥またも啼き出で暮れ方の雨にうるほふ
初夏の森

夕暮の静なる間に物思ふ窓より見ゆる青き緑
よ

白櫻去年に同じく咲きたるを見れば床しよ我
白櫻

春雨のうるほふほどに降りたるに青緑なす路
のよろしさ

暮れ行きて燈をともし頃鐘の鳴る春の夕は静
なるかな

満潮の寄せ来る音の近くして若葉は匂ふ風の
まにまに

落葉松のすくすくと立つ鏡原に水の源たづね
たりけり

落の葉の大きなるあり笹原に日なほいでぬ夏
の風吹き

水元に菫の花の咲きわたり青苔ひせる石の狭
間に

鶯の耳近く来て啼きにけり日はうらゝかの風の
簾原

したみ出づ水を眺めて思ふことまたあらしか
し心の澄むに

風そよぐ谷の上なる樹の木かけ青の落葉松香
ぐはしかりき

落葉松の林の中に我立ちて遠の彼方に行く船
を見る

青空の半は白き雲のあり初夏の來る五月の末
に

霞みたる海邊の森に雲雀啼き草原の上に牛の
くさ食む

遠き丘に草焼く煙立ちのぼり雲低うしてあた
たかき晝

鳥低く野邊の草原飛びゆけりやがては見えず
春の日和に

海岸の草は青みて新しき家而建て居る木の香
するかな

磯濱に船は上げあり漁士らは網をととのへ屯
するかな

はるかなる岬の上に立ちにける白き燈臺日に
輝けり

貝殻の落ち居る磯を歩みつゝ杖を持ちゐる我
は安けし

藻の草の白く干きて沙に付く渚を行けば波の
寄りくる

聖オーガスチンが見たりと云へる童はも大海
の水を目には映せど

頬白が磯の掛屋の竿に来て鳴く春の日の樂し
くもあるかな

横一つ横はりをり海岸の砂地の草は青く生ひ
出で

生活の昆布を乾したり幾日か経しと思はるそ
のわかめ昆布

遠く飛ぶ鳥の影も漁村らし磯の曲れる舟の繫
りに

海岸に鮑の貝の落ち居たり幾つ拾はむあはび
の貝を

沖の方はるかに見ゆる白帆をぞまたも眺むる
磯村の路

二本松立ちたる森の後方にぞ雲の真白く日は
かくれたる

鷗飛ぶ入海に来て見渡せばはるか末まで蝦夷
の島なる

磯のかみ高きに上り見渡せば船一つなき津輕
海峡

いづこ行きし白帆の影は消え失せてたゞ見る
空と海と雲とを

岨路を攀ぢて登れば笹原に葦は咲けり向つ尾
高く

たま／＼に辿りて來る丘の上羅馬の友を偲ぶ
なりけり(マルシス氏を)

高きよりながむれば海も村もよし風は遙に潮
を吹き來て

閑古鳥聞けばなつかし日暮にも二聲ばかり啼
きてゆきけり

閑古鳥又來て啼けり静なる日暮の空の明るさ
ほどに

閑古鳥なに啼く聲を若き日に聞きたる森を偲
び出でけり

山鳩やまとびのほのかに啼なきて深山ふかやまがくれ日暮ひぐれの時は
歸かへり行くらむ

閑古鳥かんこどり鞆鼓たもづ鞆鼓たもづと打ちにけり如何いかなる妙たぎの手
振ふなるらむ

露つゆ深く落葉かたは松まつの林はやし朧おぼろにていとしめやかに静しづな
る夕ゆふ

鳥とりらみな埒はらみにかへり家の外とちはいとしめやかに
露つゆ降りふにけり

霧きり深く鐘かね鳴なりにけり燈臺とうだいの航路かうろを告つぐる夜よの
その音ね

露つゆ霽はれていと静しづなる夜よにもあれ櫻さくらのかけにあ
かりほの見ゆ

よしきりの霞切る如く鳴き立つる五月くもり
日澤の茂みに

澤の水流れてひたす青草に風のそよぎの幽な
りけり

雨少し落ち來る如し曇り空若葉の色のしめや
かなるに

高さより若葉へだててながむれば沖の彼方は
湖曇りする

黄なる花咲きてありけり何花かいと小さなる
道の邊の草

青き木を見ればなつかし下蔭を樂園のごと思
ひけるかな

三つ葉なるクローバこそは善かりけれ緑の草
の中にもまして

谷あひに若葉は多く繁りたり水と鳥との聲は
幽かに

霞はれよ笛を鳴らして行く船の海路は難し東
と西に

行く船も入る船も笛鳴らし行く霞白うして日
の光る海

青き原はるかに見れば遠山のいたゞき見ゆる
霞の上に

白き花咲けるも春のよろこびぞ青野の原の央
のところ

春霞立ちこめしゆゑ寄る波の白きもほのに見ゆる晝かな

谷渡る鶯のこゑ落葉松の林の中にすがたは見えず

森にそひて草原行けば薫して杉にからまる青き蔓かな

蝶々の紫なるもありにけりふたつ纏れて遊ぶ眞晝に

小さな杉の林に立ち入れば明るき晝の涼しくもあるかな

小鳥来て三つばかり居る青き木を生命の樹とも思ひけるかも

谷の水玉の如くに流れたり音なく風は草をわたりて

日が暮れて窓に明りのさす時に今日の一日を喜び謝せむ

浦安の心おぼえぬ祈りたる後の一時得やは言ふべき

おだまきの葉なるが咲きにけりその葉も床し三つ葉になりて

蠅来り胸に飛びたりかすかなるうなりも聞ゆ往の篋原

畑より歸れる人に夕日さしいと大いなる光なるかな

ひろびろと高原の上を照りわたる春の光はあ
まねきかもよ

鳥一羽青き野を飛びゆきにけり杉の林を越え
て見えずも

炊煙の出でたる家の萱葺の彼方に森は繁りた
りけり

黒き土おこされてあるその上に天つ光は照れ
り春の日

山高く繁りたりけりいつの日か生命は春の光
にそひて

雲雀鳴く高どに天つ日の光照れるを見ればう
つくしきかも

しめやかに青み暮れ行く夕暮の我窓の外に鳥
なきやみぬ

花やかに櫻のかげのさしたりと思ふ我家の窓
の硝子戸

赤雲の消えて薄るゝ水色の空の静けさ山の彼
方に

笛鳴らし船の行きたる後の海たゞ潮鳴の寄す
る音のみ

高原の朝に出で居る牛の群日はあたゝかに薫
ゆるが如し

此處に来て鶯を聴く谷深く風のそよげる楊の
かげに

大きな橋の上より眺むれば谷には杉の茂り
たりけり

谷間には青き杉また楊などうちまぢりつゝ茂
りたりけり

谷あひの風に吹かれて来る霧は杉の林を暈し
たりけり

静なるやなぎの蔭に立ち寄り春よく繁る青
の一もと

立ち寄りし若葉の蔭を忘れ兼ねまたもたゝず
ひその風の下

落葉松の林の上の白雲に夏の來るを知られけ
るかな

閑古鳥啼かぬ日とてはなかりけり今年も聲を
待ちてありしが

月夜にも耕せし者ありにけり今は如何にと思
ふ野の路

降る雨の滋くなりたり櫻葉の風に搖げる窓に
見るかも

畑土の黒さが雨にうるほひてさびしくもあら
ず春の一日は

羽黒く胸白き鳥来ては鳴く我家の春は樂しか
りけり

したしくぞ思ふ小鳥よ日毎来て我を慰む羽黒
き鳥

幾萬の花を咲かせぬ我神の恵によりて細き櫻も

風吹きて雲たゞならずやうく／＼に明るむ空を
仰ぎ見るかな

一夜二夜風ふきたれば葉櫻の葉はしげりつゝ
花は散りたり

櫻散りぬ黒土の上にあと著るく雨と風との晨
に見れば

とき／＼にあらしの如き雨のして草は沈めり
青の一色

風の音と雨の音とを聞きをれば小鳥啼きいづ
霽るゝにやあらむ

八重櫻^{やえざくら}阜月^{ふづき}の末^{すえ}に咲^さきにけり北國^{きたくに}の春^{はる}は闌^{たがひ}に
して

海邊^{うみべ}にて拾^{ひろ}ひし石^{いし}に寄^よる波^{なみ}の跡^{あと}しるくあり善^よ
き渦卷^{うずまき}よ

明日^{あした}は晴^はれよ五月^{ごがつ}の雨^{あめ}の空^{そら}の色^{いろ}いさゝか青^{あお}し
雲^{くも}の旗手^{はたて}に

薄墨^{うすすみ}の色^{いろ}せる雲^{くも}のこなたなるボブラのそよぐ
夕^{ゆふ}の静^{しず}けさ

雲^{くも}曳^ひきて星^{ほし}の出^いでたる夕^{ゆふ}静^{しず}か鐘^{かね}の鳴^なりたる後^{のち}
の一^{ひと}時^{とき}

西風^{せいふう}の強^{つよ}くし吹^ふけば日^ひの出^いづる朝^{あさ}に至^{いた}りて晴^は
となるらむ

風の音聴きつゝあれば夜ぞ更くる春にはあれ
どこゝろさびしき

子らの聲林の中にするを聞く雨霽れがたの初
夏の晝

鶯の深山がくれに啼き立つる春も終の谷渡る
聲

梨の花白きを見れば淡雪の降れるが如し初夏
の畑

黄金なす色は雲間に見えにけり日は山に入る
今日の終に

ほの白く咲ける夜の花星もなぐたゞ静なる心
地するかな

夜の更けて静なる雨降りて来ぬ今宵眠らむい
や安らかに

雨霽れて青空見ゆる我庭に櫻散るなり海風吹
きて

初夏の一日二日と過ぎ行きて鳥鳴くこともし
きりなりけり

遠き空をかすかに啼きて過ぎて行く小鳥の聲
の聞えたるかな

しめやかに雨降る中を荷車の遠き村より歸る
夕暮

煙りたる青き森こそ見ゆるなれ雨ふる野邊の
はるか彼方に

縁なす花園に来て鳥一羽さゝ啼きをしぬ雨降
る中に

杜鵑いとさはやかに啼きにけり降りみ降らず
み雨霽れし頃

聖堂の十字架の上に白き雲上りたりけり初夏
の晝

うるはしき光を見たりやがてまた雲にかくれ
ぬ淋しいかなや

人知らぬ地に生ひ出でし厥こそ隠者と稚兒の
友にはありけれ

櫻にも匂ありけり八重櫻盛りの頃の風のそよ
ぎに

燕つばき多く飛び交かひにけり夕暮ゆふぐれの明あるき時の水色みづいろ
の空

雀すずめ一羽ひと笈かひに來きり飛とびてゆく蒲公英たんぽぽの穂ほとなり
し野の畑はたけ

閑古鳥かんこどり曇空くもりぞらにも啼なきにけり若葉わかばも濃こゆき南の
森に

山峽やまがせに雨降あめり來きり白雲しらくもの往ゆきかひ絶たえぬ丸山まるやま
の麓ふもと

波の音静しづかになりて春の夜の雨と風とは止とみに
けるかも

清らかに小鳥啼こどりなきけり朝早く日は昇のぼり出いで照て
りわたるに

閑古鳥谷を渡りて啼きにけり若葉にそよぐ黄昏の風

若蘆の生ひ出づる頃芥を摘む澤のほとりに風そよぎつゝ

日の暮に子らの遊びてうたふ聲聞けば夏來しこゝちこそすれ

聖堂のあかりの點ける日の暮に蛙の聲の鳴き初めにけり

夏の露野にあり夕明るくてまだ樹の蔭に月は出でずも

鳴のなくたゞ一聲をきゝたるが日は暮れ行き
て静なるかも

夜更けてほととぎす聞く繁りたる若葉の木々の
彼方はるかに

高原の日没によき日の暮の山と空とを仰ぎ見
るかな

風吹きてあだやかならず夜は更けぬ祈の心静
なる時

海の風波にまぢりて吹く音す夜はくだちたり
明日を思はむ

雨降りて青草そよぐ窓の外たゞ静なる心なる
かな

垂れこめてたゞありぬらむ人々はなりはひ休
み雨降りたれば

雨と風吹ける中にも閑古鳥啼くを床しむ寒く
はあらむ

咲き残る八重櫻の花如何ならむ夜は暗くして
風も強さを

やう／＼に霽れゆく空の山の雲若葉は雨にう
るほひにけり

おだまきの紫なるが今朝もなほ雨にいたまず
開きたりけり

八重櫻つひに散りけり雨のうち咲きに咲きた
る我が八重櫻

山鳩の啼き止みしあと静なる雨も降り出で若
葉薫ゆりぬ

閑古鳥啼けばこだます山彦の山と森とに霞む
雨の日

山鳩の聲ほのかなり霧の奥深山がくれに姿は
見えず

灰色の曇れる空を垂れこめて一日二日と過し
たりけり

雲あがり閑古鳥啼く梅雨の日に山は晴れたり
青葉若葉の

静なる落葉松の林夕雲の霽れむとしつゝ日は
暮れにけり

雲雀揚り高く啼きたり雨霽れて光を宿す雲の
絶間に

去年植ゑし鈴蘭咲きて匂ひけりその花白き水の邊の夏

檜の若葉風にそよぎて影をさすその下蔭のしたしくもあるかな

久にして雨霽れたれば若葉する林の緑いとも新し

ゆく船の残せる煙青空の雲ともならむゆくゑをぞ見る

野葡萄の絡める木々は若葉して坂の最中の晝は關

寄る波の白きぞ見ゆる磯は干て北海のとある木の枝越しに

青空の雲を眺めぬ坂路より縊りて眞白さその
鱗雲

既に夏の雲の峰とぞ見られける北海の山の上
に疊める

樹々すべて若葉しにけり白雲の臨める野邊の
此面彼面に

桃の花畑の中に咲きにけり海のほとりの丘の
邊の春

クローバの三つ葉の葉をば手に取りつ日に透
かし見る青の一色

玉のごとうるはしき空和らかき慈光を何の言
葉にかせむ

野の黄なる花を眺めてたゞすみぬ光うるはし
小さき花にも

和かき光は我をあたゝめぬ青き草葉の中に立
つ時

杉の木を常に眺めつゝ我天地を親しく思
ふ

聖堂の前に照る日は斜なり夏の夕の時は早く
て

羊出でて草を食みつゝ歩みゆく牧場を夏の日
は照らすなり

葉櫻の家居に近くしげりたるわづかの風にそ
よぐよろしも

馬立て、土を犁きゆく若者の顔と鞭とを日は
照らすなり

覆ひたる雲の間にところく青空の見ゆ静け
き夕

鐘の音鳴り響くなり松林そとろあるけば夕に
近く

ほととぎすしは啼く聲をき、澄ます曇れる空
の緑の林

何鳥か頭の上を飛び過ぎぬ雨も降り來む空模
様して

我家の庭の花壇に咲きにける小さき花は星の
如かり

船の灯の朧に見ゆる海の上に霧は眞白しそよ
風の吹く

牧草は伸びて茂れりいつしかに北國の野に夏
近みつゝ

曇日の若葉はよしや鳥が飛ぶ水無月初め六日
ばかりに

木に棘の草に棘あるものぞみな人の苦土より
生ふる

薊をばアイヌの國に見たりけり草にとげある
薊の青さ

樂園を出されてよりくるしみの生ひいでにけ
り薊をはじめ

善き芹の恵の中に生ひ出でて落もみつばも摘
ひべかりけり

山鳩のほろゝほろゝと啼く晝の白きを見れば
たのしかりけり

蒲公英のわた毛は白し畑中に風のそよぎのか
すかに見ゆる

ほととぎす曇日に啼くしたしさよ若葉の谷の
しばしの時を

子規啼き渡るなり遠に消え幽になりて末はほ
のかに

四とせ前植ゑたるポプラ風にそよぎ葉のよく
繁る木とはなりけり

静なる小雨の音の聞え來ぬ木の葉そよがす風
にかあらむ

櫻草紅さも咲けり時を経てつぎく開く俄さ
くら草

羊齒の葉の谷間に繁り青くして朝の光にそよ
ぐよろしも

ゆく水の流れて音す落の葉の草にまぢりて生
ふる谷間に

赤き花咲きたり汝は蝦夷の地の少女のごと
ありにけるかも

雀一羽小路に下りてやがてまた飛びて行きた
り若葉の谷に

庭 山吹の花は咲きたり聖堂のいと静なる六月の

牧草を刈れる信者の女達朝のはたらく時にて
ありけり

雲雀啼く廣き青野の彼方にどはるかに見ゆる
白き燈臺

菜の花のところづくに咲きにけり北海の地の
春遅くして

子ら遊ぶ青き野原に驅りつゝ彼方に白き雲出
でにけり

おもしろき小徑なるかな若葉して小鳥も立ち
ぬ傍近う

瑞枝さす並木の下の草路に小さき白き蝶のと
びけり

人住めど家まばらなり若葉して林のつゞく静
なる地は

桐の花紫に咲く畑中にこごめ櫻も開きたりけ
り

桐の花匂ふ床しさそよかせにしはし佇む初
夏の日よ

小鳥鳴く青き林に紅き色いとさやかなり脚
の花よ

海近き草徑をゆく若葉蔭行く船を見るいと平
かに

行々子の鳴ける笹原 竝立ちて人の出で居る黒
き畑に

遠き雲出でて昇れり 又後の雲はかゝれり 夏山
のかけ

我庭の春こそ今は盛りなれ 紅紫に青葉をそへ
て

青空のいよゝ澄みけり 日の光あまねきかもよ
夏の來りて

青空のまたなく晴れて 山の上いと明らかに 若
葉を見ゆる

蟻の這ふ坂の小路に 日は照りて 夏はきたらむ
影のいと濃き

赤馬の草を食み居る崖下に日は輝きて夏は來にけり

白帆掛け行く船見えて初夏の風は海邊を吹き來りぬ

つばくらめ青空かけて飛び行けり松の林に雲は浮きつゝ

蝶々のむつみあそびてたゞふたつ路の上にあり夏の日は照る

輝かに水は流れぬ青草の茂れる谷を幾廻りして

うるはしくよき日なるかな日の光若葉を照らす夏の高原

夕暮ゆふぐの静しずなる中に小鳥こどりなく今日けふ一日いちにちの樂たのしく
あるかな

水みづ鶏どりたしく濱はま邊べに近ちかき岡おかの家いへ灯あかりをともしさる
夕ゆふの一時ひととき

三さん日にち月げつのさやかに出いづる初夏はつまつの夕ゆふの時ときをなつ
かしむかな

晴はれながら露つゆかゝる日は青空あおぞらに喜よろこありと思おもひ
ぬるかな

花はなと花はなとの中なかを通とほりて岡おかをくだるそよ風かぜ吹ふき
て晝ひる長なが閑ひらなり

白しろき牛うし若わか葉はの蔭かげに一つをり白雲しろくも出いでて岡おかに上のぼ
れり

空の上にて啼くかと思ふ閑古鳥青きを己が衣
ともして

ひらひらと風にそよげるポプラの葉やがて静
になりけるかも

静なる真晝の家に鳥を聴く此世の外のことち
するかな

明るき日蠅の音だに聞くさへもいとどかな
る心地するかな

杜鵑青空の下に啼きにけり夜にのみ聴きてよ
かるべきかは

静なる青き一日の暮れ行きて聞くはよろしき
アンゼラスの鐘

三日月も出でて静けきたそがれや今日一日を
楽しく思ふ

鳴の聲ほのかに暮るゝ夕暮のそことも分かず
聞きにけるかも

聖堂のドオムの上にかゝりたる星の一つがう
つくしきかな

輝きて山と海とを照らしたるこの細月ぞいと
も澄みたる

濤の音高く聞ゆる月の夜はいとさはやかに更
けわたたりたり

寄せては引き引きては寄する波の音あらしの
如くひびけどしづか

ほととぎす若葉曇りの朝空を啼きて過ぎゆく
日毎にぞさく

山かくれ霞白けれど日の光草のそよぎの中に
ありけり

鳥來りまた飛びてゆく葉櫻の風のそよぎは涼
しかりけり

笛鳴らし船往きかよふ津輕海霧霽れゆきて空
青みたり

風そよぐ庭の草叢青くして光の綺を織れるが
如し

黄なる躑躅紅き躑躅に並びたり花の異なるを
眺めやるかな

圓らかに疊はりたり白雲は青葉の岡の上にか
くれて

白雲の出でて重なる青空を坂の中らに眺めた
るかな

大いなる白雲出でし岡の上風は吹きゆく空の
中どを

白雲のかゝり棚曳く海の上こなたに青き杉の
林よ

白雲の疊はり出でし彼方にはなほ嶽ありと思
ひたるかな

ほとゝぎす姿は見えず青空と落葉松とにひび
くそのこゑ

青海に白波立ちて鷗どり泛べるごとし初夏の
晝

松原の松の影ひく草原に鳥の聲するさやかな
るかな

風そよぎ松の林に音籠り青空の見ゆ高さあを
ぞら

差し交す瑞枝若枝に日の光透きとほりたり松
原の奥

松原の小徑は静風そよぐ樹と樹の枝は重なり
合ひつ

立ちどまり耳を澄せばさはやかに松にこもれ
る風の韻よ

雲下りて山をつゝみぬ青空の光よりくるその
偉いさよ

人は皆仰ぎ望めよ天つ神創造の時より末の世
までも

八重櫻青葉の蔭に咲きにけり色は褪すれど花
は散らずに

よしきりのおもしろく鳴き風動き光影さす眞
晝の小家

茫々と雲立ち罩めて風が吹くわづかにしるさ
白楊の葉よ

風吹けばあたり淋しくなりにけり心ばかりは
温くせむ

風淋しかうかうと吹き草そよぎ雨こそふらね
曇り勝ちなる (梅雨の日に)

鳥鳴きつ風うちそよぐ曇り日の霽れざる空の
野を低くゆく

雨つひに降り出でにけり梅雨の空小鳥の聲も
しばし來鳴かず

近き樹に遠き林に雨の音草木はすべて風に揺
れをり

侘しくも垂れこめてある部屋ぬちに湯は沸き
てをり梅雨の一日

そことなく明るむ窓の外のはひ風にそよぐ
を眺めやるかな

雨の音しきりにひとき満の聲まぢりてきこゆ
六月の日に

六月の祝日多き教會の定めし時は青葉しにけ

波の音遠くきこゆる風の音にまぢれば更に淋
しかりけり

別離

此世にて別れはすれど後の日に相見むと思ふ
さらば別れぞ

天つ國われら望みて尙待たむ今は別れて地を
離るれど

今別れ會はむ期なしと思ふなかれ天つ御空の
國をよもひて

鳥と別るゝに臨みて四首

地に鳥の、人の、置かれて一つなるものと思ふに別を惜む

黒き鳥二聲ばかり啼きたるに別を惜しと思ひけるかも (大正十三年六月十日)

年々に啼きて變らぬその鳥を今は別とおもひけるかも

とき／＼に音づれて來よ異なる國と家とに春が來れば

いつくしみ深き我父我神を如何なる言葉かよく讀へ得む

夕暮となりけり今日の一日の終に祈り安く思はむ

一聲を鳥の啼きたる夕暮の明りは沈む草青く
して

寛より小水流るゝ音聞え夜は静に更け行きに
けり

風少し出で來りたり野をゆきてはさまはさま
に鳴りどよむらむ

閑古鳥朝まだきより啼きにけり雨にうるほふ
森の彼方に

閑古鳥小雨の中に啼きにけりあすは立たなむ
我を知らなく

月あれど雨にかくれてほの白き野のあなたに
ぞ鳴の鳴くなる

牛の群道に出でたり粗朶とりの歸り來れる山の林の

海の水青く懸立ち少峽の間に見えてまたもかくる

雲白くかゝりたれども日は透す山の間の一筋の路

青杉と落葉松とまぢるかたはらに小馬も出でてあそびゐるかも

寄る波の見えつ隠れつめぐりゆく山の峽間はこじしかるかも

白雲のたなびく山と海峡としばらく見えてありにけるかも

高き杉生ひ立ちにける谷隈に畑の見ゆる山の
組路

平なる所に出でつ海岸の路には白き花の咲き
けり

雲白く海にのぼれり青き空やうく見ゆる梅
雨の一日

ひろびろと打ち開けたる野の村に陽はかげり
ゆく山に残りて

閑古鳥こゝにても聞く我家を離れて山を越え
し館に

海添ひの町に車のゆく見えて雲のましろさ初
夏の午後

日は既に晴れて柳の彼方にぞいとなつかしき
青空を見る

沙地にも馬鈴薯植ゑてのたりけりとあるはず
れの海岸の町

沙濱の遠くつゞける彼方にぞ寄邊の波は眞白
かりける

風は今大わだの原を渡りくる末は雲路に見え
わかぬかも

沙濱を踏みて行く時何虫か匍へるを見たり初
夏の日に

鴉来て磯の小家にとまりけり蕪菜をうゑし畑
に日は照る

炭の荷をつけて來れる親馬と子馬とを見る海
岸の町

鈴蘭を摘める子あまた歸りくる薫りの道にあ
ふれたるかも

●小樽公園にて立てる木を詠める

三つの木一つになりて生ひにける青き樹かげ
よ汝に憩ふべし

若葉よし小樽の町の高臺の窓より見ゆる雨の
そゝぎに

鳥が來る若葉の枝に雨はれてあかるむ街のさ
へくしよ

一日を善く送りきと思ひいづ疲れて後の眠の
時に

夜の風涼しく吹きて入りにけり物を思ひて窓
開けをれば

一ところ朝日は白く雲間洩れ光は山と野とに
あふるゝ

うづまける光と雲の神々し杉の森より山を望
めば

落葉松の林は好くもつゞきたり朝の草野に馬
の出で居る

樹と家とへだてし彼方雲ありて丘はつゞけり
いと平かに

松林つゞける北の街道に桔梗といへる宿のあ
りけり

青き田に雲は映れり並み積く夏の畑は木々の
立つかも

うるはしき朝の白雲出でたるを海の小舟に立
ちて見るかも

船多く灣に集り煙吐き船出のためうごき居
るかも

小さき舟片帆をかけて三つばかり朝のしづけ
き灣を行くかも

荷を多く積みたる舟を押してゆく船楫の人を
彼方にぞ見る

初夏の雲の此方の入海に星のしるしの白き船
浮く

そよ風の東より吹く朝の海海鳥の来て船にと
まりぬ

解ぶね漕ぎゆく灣に屯する汽船はあまた並び
たりけり

函館港

この湊鐘撞堂のそびえたる天主の御堂美しく
見ゆ

青葉する山を負ひたる函館の港を出づる朝は
よろしも

沖の方船一つ見ゆ海峡の津輕の山は紫なるに

風の吹く方に向ひて行く船のさすがに朝は涼
しかりけり

岩山のいとあもしろき海峡のとある岬をなが
めたるかも

青空の白き雲間に出でて霞は山に立ちの
ぼりけり

基督の「十字架の道」懸けし繪をながむる朝
はいと清きかも

離れ来る港を後にすゝみゆく静けき海ぞうれ
しかりける

沖の石離れて一つ見えにけり海峡の端朝風吹
きて

鷗どり海に飛び来て羽を伸すさらにも雲に行
きて見えずも

静なる翼を搏ちて飛びてゆく鳥は海路を渡り
けるかも

渡り鳥うち連れて行く海の上いとも早しよ小
さき翼

靡る山にのぼれる夏の雲わが乗る船は水脈を
引きゆく

山かげのあたゝかくして日の光草蒸す如し閑
古鳥なく

山鳩も啼き出でにけり山裾の暖き路を歸り來
ぬれば

梅雨の雲かゝれる山の若葉にぞ啼くほととぎ
すうれしかりける

御惠のいとさはにして感謝する言葉も知らず
人のなりはひ

月出でて風にそよげる木の葉をば見れば心の
静なりけり

満月の白き光を眺むれば心に残る限なかりけ
り

月の夜に鳴こそ鳴けれ一入に静けさまさる聲
にあるかな

牧草の生ひ茂りたり我家の門には夏の白く見
え来て

青空のいと広くして落葉松の林に見ゆる美し
さかも

木が茂り草が茂りて夏近し山鳩なきて晝深き
かも

あたゝかき日は照りにけり鶏の子鳥をつれて
あそぶ葉かげに

曇はる雲は遙に青海の上にかゝりぬそよ風ふ
きて

夏雲のいと白さかも空に立つ山の峯よりいと
妙にして

貝拾ふ海の磯邊に日は照りて向う島山晝霞み
たり

朝も鳴き夕にも鳴く行々子の谷間に聲は休ま
ざりけり